

堀
辰雄

燃
ゆ
る
頬



燃
ゆ
る
類

私は十七になった。そして中学校から高等学校へはいったばかりの時分であった。

私の両親は、私が彼らの許もとであんまり神経質に育つことを恐れて、私をその寄宿舎に入れた。そういう環境の変化は、私の性格にいちじるしい影響を与えずにはおかなかつた。それによって、私の少年時からの脱皮は、気味悪いまでに促されつつあった。

寄宿舎は、あたかも蜂の巣のように、いくつもの小さ

い部屋に分れていた。そしてその一つ一つの部屋には、それぞれ十人余りの生徒らが一しよくたに生きていた。それに部屋とは云うものの、中にはただ、穴だらけの、大きな卓つくえが二つ三つ置いてあるきりだった。そしてその卓の上には誰のものともつかず、白筋のはいつた制帽とか、辞書とか、ノオトブックとか、インク壺つぼとか、煙草の袋とか、それらのものがごっちやになって積み重ねられてあった。そんなものの中で、ある者は独逸語ドイツの勉強をしていたり、ある者は足のこわれかかった古椅子ふるいすにあぶなっかしそうに馬乗りになって煙草ばかり吹かしていた。

私は彼らの中で一番小さかった。私は彼らから仲間はずれにされないように、苦しげに煙草をふかし、まだ髭ひげの生えていない頬にこわごわ剃刀かみそりをあてたりした。

二階の寝室はへんに臭かった。その汚れた下着類のにおいは私をむかつかせた。私が眠ると、そのにおいは私の夢の中にまで入ってきて、まだ現実では私の見知らぬい感覚を、その夢に与えた。私はしかし、そのにおいにもだんだん慣れて行った。

こうして私の脱皮はすでに用意されつつあった。そしてただ最後の一撃だけが残されていた……

ある日の昼休みに、私は一人でぶらぶらと、植物実験室の南側にある、ひっそりした花壇のなかを歩いていった。そのうちに、私はふと足を止めた。そこの一隅に簇むらがりながら咲いている、私の名前を知らない真白な花から、花粉まみれになって、一匹の蜜蜂みつばちの飛び立つのを見つけたのだ。そこで、その蜜蜂がその足にくっついていている花粉の塊かたまりを、今度はどの花へ持っていくか、見ていてやろうと思ったのである。しかし、そいつはどの花にもなかなか止まりそうもなかった。そしてあたかもそれら

の花のどれを選んだらいいかと迷っているようにも見えた。……その瞬間だった。私はそれらの見知らない花が一せいに、その蜜蜂を自分のところへ誘おうとして、なんだかめいめいの雌^{めしべ}蕊を妙な姿態にくねらせるのを認めたとような気がした。

……そのうちに、とうとうその蜜蜂は或る花を選んで、それにぶらさがるようにして止まった。その花粉まみれの足でその小さな柱頭にしがみつきながら。やがてその蜜蜂はそれから飛び立っていった。私はそれを見ると、なんだか急に子供のよ様な残酷な気持になって、いま受

精を終わったばかりの、その花をいきなり搥りとった。そしてじいっと、他の花の花粉を浴びている、その柱頭に見入っていたが、しまいには私はそれを私の掌てのひらで揉みくちやにしてしまった。それから私はなおも、さまざまな燃えるような紅や紫の花の咲いている花壇のなかをぶらついていた。その時、その花壇にT字形をなして面している植物実験室の中から、硝子戸ガラスごしに私の名前を呼ぶものがあつた。見ると、それは魚住うおずみと云う上級生であつた。

「来て見たまえ。

顕微鏡けんびきようを見せてやろう……」

その魚住と云う上級生は、私の倍もあるような大男で、円盤投げの選手をしていた。グラウンドに出ているとき
の彼は、その頃私たちの中に流行していた希臘彫刻ギリシアの独
逸製の絵はがきの一つの、「円盤投手デイスカスヴェルフエル」と云うのに
少し似ていた。そしてそれが下級生たちに彼を偶像化さ
せていた。が、彼は誰に向っても、いつも人を馬鹿にし
たような表情を浮べていた。私はそういう彼の気に入り
たいと思った。私はその植物実験室のなかへ這入はいって
いた。

そこには魚住ひとりしかいなかった。彼は毛ぶかい手

で、不器用そうに何かのプレパラートをつくっていた。そしてときどきツアイスの顕微鏡でそれを覗のぞいていた。それからそれを私にも覗かせた。私はそれを見るためには、身体からだを海老えびのように折り曲げていなければならなかった。

「見えるか？」

「ええ……」

私はそういうぎごちない姿勢を続けながら、しかしもう一方の、顕微鏡を見ていない眼でもって、そつと魚住の動作を窺うかがっていた。すこし前から私は彼の顔が異様

に変化しだしたのに気づいていた。その実験室の中の
明るい光線のせいか、それとも彼がいつもの仮面をぬい
でいるせいか、彼の頬の肉は妙にたるんでいて、その眼
は真赤まっかに充血していた。そして口許くちもとにはたえず少女のよ
うな弱々しい微笑をちらつかせていた。私は何とはなし
に、今のさつき見たばかりの一匹の蜜蜂と見知らない真
白な花のことを思い出した。彼の熱い呼吸が私の頬にか
かって来た……

私はついと顕微鏡から顔を上げた。

「もう、僕……」と腕時計を見ながら、私は口ごもるよ

うに云った。

「教室へ行かなくっちゃ……」

「そうか」

いつのまにか魚住は巧妙に新しい仮面をつけていた。そしていくぶん青くなっている私の顔を見下ろしながら、彼は平生の、人を馬鹿にしたような表情を浮べていた。

*

五月になつてから、私たちの部屋に三枝さいぐさと云う私の同級生が他から転室してきた。彼は私より一つだけ年上だった。彼が上級生たちから少年視されていたことはかなり有名だった。彼は瘡やせた、静脈の透いて見えるような美しい皮膚の少年だった。まだ薔薇ばらいろの頬の所有者、私は彼のそういう貧血性の美しさを羨うらやんだ。私は教室で、しばしば、教科書の蔭から、彼のほっそりした頸くびを偷ぬすみ見ているようなことさえあった。

夜、三枝は誰よりも先に、二階の寢室へ行つた。

寢室は毎夜、規定の就眠時間の十時にならなければ電

燈がつかかなかった。それなのに彼は九時頃から寢室へ行ってしまふのだった。私はそんな闇やみのなかで眠っている彼の寝顔を、いろんな風に夢みた。

しかし私は習慣から十二時頃にならなければ寢室へは行かなかった。

ある夜、私は喉のどが痛かった。私はすこし熱があるように思った。私は三枝が寢室へ行つてから間もなく、西洋蠟燭ろうそくを手にして階段を昇つて行つた。そして何の気なしに自分の寢室のドアを開けた。そのなかは真暗だったが、私の手にしていた蠟燭が、突然、大きな鳥のような恰好かつこう

をした異様な影を、その天井に投げた。それは格闘か何んかしているように、無気味に、揺れ動いていた。私の心臓はどきどきした。……が、それは一瞬間に過ぎなかった。私とその天井に見出した幻影は、ただ蠟燭の光りの気まぐれな動揺のせいらしかった。なぜなら、私の蠟燭の光りがそれほど揺れなくなつた時分には、ただ、三枝が壁ぎわの寢床に寝ているほか、その枕まくらもとに、もうひとりふひとりの大きな男が、マントをかぶつたまま、むつつりと不機嫌ふきげんそうに坐っているのを見たきりであつたから

……

「誰だ？」とそのマントをかぶった男が私の方をふりむいた。

私は惶あわてて私の蠟燭を消した。それが魚住らしいのを認めただからだった。私はいつかの植物実験室の時から、彼が私を憎んでいるにちがいないと信じていた。私は黙ったまま、三枝の隣りの、自分のうす汚よごれた蒲団の中にもぐり込んだ。

三枝もさつきから黙っているらしかった。

私の悪い喉のどをしめつけるような数分間が過ぎた。その魚住らしい男はとうとう立上った。そして何も云わずに

暗がりの中で荒あらしい音を立てながら、寢室を出て行った。その足音が遠のくと、私は三枝に、

「僕は喉が痛いんだ……」とすこし具合が悪そうに云った。

「熱はないの？」彼が訊きいた。

「すこしあるらしいんだ」

「どれ、見せたまえ……」

そう云いながら三枝は自分の蒲団からすこし身体をのり出して、私のすきすきする顛顛こめかみの上に彼の冷たい手をあてがった。私は息をつめていた。それから彼は私の手頸てくび

を握った。私の脈を見るのにしては、それは少しへんてこな握り方だった。それなのに私は、自分の脈みやくはく搏の急に高くなつたのを彼に気づかれはしまいかと、そればかり心配していた……

翌日、私は一日中寢床の中にもぐりながら、これからも毎晩早く寢室へ来られるため、私の喉の痛みがいつまでも癒なおらなければいとさえ思っていた。

数日後、夕方から私の喉がまた痛みだした。私はわざと咳せきをしながら、三枝のすぐ後から寢室に行った。しか

し、彼の床はからっぽだった。どこへ行ってしまったのか、彼はなかなか帰って来なかった。

一時間ばかり過ぎた。私はひとりで苦しんでいた。私は自分の喉がひどく悪いように思い、ひよつとしたら自分はこの病気で死んでしまいかも知れないなぞと考えたりしていた。

彼はやっと帰って来た。私はさつきから自分の枕まくらもと許に蠟燭をつけばなしにしておいた。その光りが、服をぬごうとして身もだえしている彼の姿を、天井に無気味に映した。私はいつかの晩の幻を思い浮べた。私は彼に今

までどこへ行っていたのかと訊いた。彼は眠れそうもなかったからグラウンドを一人で散歩して来たのだと答えた。それはいかにも嘘らしい云い方だった。が、私はなんにも云わずにいた。

「蠟燭はつけて置くのかい？」彼が訊いた。

「どっちでもいいよ」

「じゃ、消すよ……」

そう云いながら、彼は私の枕許の蠟燭を消すために、彼の顔を私の顔に近づけてきた。私は、その長い睫毛まっげのかげが蠟燭の光りでちらちらしている彼の頬を、じつと

見あげていた。私の火のようにほてった頬には、それが神々こころこころしいくらい冷たそうに感ぜられた。

私と三枝との関係は、いつしか友情の限界を超え出したように見えた。しかしそのように三枝が私に近づいてくるにつれ、その一方では、魚住がますます寄宿生たちに対して乱暴になり、時々グラウンドに出ては、ひとりで狂人のように円盤投げをしているのが、見かけられるようになった。

そのうちに学期試験が近づいてきた。寄宿生たちはそ

の準備をし出した。魚住がその試験を前にして、寄宿舎から姿を消してしまったことを私たちは知った。しかし私たちは、それについては口をつぐんでいた。

*

夏休みになった。

私は三枝と一週間ばかりの予定で、ある半島へ旅行しようとしていた。

あるどんよりと曇った午前、私たちはまるで両親をだ

まして悪戯いたずらかなんかしようとしている子供らのように、いくぶん陰気になりながら、出発した。

私たちはその半島の或る駅で下り、そこから二里ばかり海岸に沿うた道を歩いた後、鋸のこぎりのような形をした山にいだかれた、ある小さな漁村に到着した。宿屋はもの悲しかった。暗くなると、何処からともなく海草の香りがしてきた。少婢がランプをもつて入ってきた、私はそのうす暗いランプの光りで、寢床へ入ろうとしてシャツをぬいでいる、三枝の裸かになった背中に、一ところだけ背骨が妙な具合に突起しているのを見つけた。私は何

だかそれがいじってみたくなくなった。そして私はそここのところへ指をつけながら、

「これは何だい？」と訊いてみた。

「それかい……」彼は少し顔を赧あからめながら云った。

「それは脊椎せきついカリエスの痕あとなんだ」

「ちよつといじらせない？」

そう云って、私は彼を裸かにさせたまま、その背骨のへんな突起を、象牙ぞうげでもいじるように、何度も撫なでてみた。彼は目をつぶりながら、なんだか擦くすくったそうにしていた。

翌日もまたどんよりと曇っていた。それでも私たちは出発した。そして再び海岸に沿うた小石の多い道を歩きだした。いくつか小さい村を通り過ぎた。だが、正午頃、それらの村の一つに近づこうとした時分になると、今にも雨が降って来そうな暗い空合になった。それに私たちはもう歩きつかれ、互にすこし不機嫌になっていた。私たちはその村へ入ったら、いつ頃乗合馬車はその村を通るかを、尋ねてみようと思っていた。

その村へ入ろうとするとところに、一つの小さな板橋が

かかっていた。そしてその板橋の上には、五六人の村の娘たちが、めいめいに魚籠びくをさげながら、立ったまままで、何かしやべっていた。私たちが近づくのを見ると、彼女たちはしやべるのを止めた。そして私たちの方を珍らしそうに見つめていた。私はそれらの少女たちの中から、一人の眼つきの美しい少女を選びだすと、その少女ばかりじっと見つめた。彼女は少女たちの中では一番年上らしかつた。そして彼女は私がいくら無作法に見つめても、平気で私に見られるがままになっていた。そんな場合にあらゆる若者がするであろうように、私は短い時間のう

ちに来るだけ自分を強くその少女に印象させようとして、さまざまな動作を工夫した。そして私は彼女と一こともでもいいから何か言葉を交^かわしたいと思いつながら、しかしそれも出来ずに、彼女のそばを離れようとしていた。そのとき突然、三枝が歩みを弛^{ゆる}めた。そして彼はその少女の方へずかずかと近づいて行った。私も思わず立ち止りながら、彼が私に先廻りしてその少女に馬車のことを尋ねようとしているらしいのを認めた。

私はそういう彼の機敏な行為によってその少女の心に彼の方が私よりも一そう強く印象されはすまいかと気づ

かった。そこで私もまた、その少女に近づいて行きながら、彼が質問している間、彼女の魚籠の中をのぞいていた。

少女はすこしも羞はにかまわずに彼に答えていた。彼女の声は、彼女の美しい眼つきを裏切るような、妙に咳しやが枯れた声だった。が、その声がわりのしているらしい少女の声は、かえって私をふしぎに魅惑した。

今度は私が質問する番だった。私はさつきからのぞき込んでいた魚籠を指さしながら、おずおずと、その小さな魚は何という魚かと尋ねた。

「ふふふ……」

少女はさも可笑^{おか}しくって溜^{たま}らないように笑った。それにつれて、他の少女たちもどつと笑った。よほど私の問い方が可笑しかったものと見える。私は思わず顔を赧^{あか}らめた。そのとき私は、三枝の顔にも、ちらりと意地悪そうな微笑の浮んだのを認めた。

私は突然、彼に一種の敵意のようなものを感じ出した。私たちは黙りあって、その村はずれにあるという乗合馬車の発着所へ向った。そこへ着いてからも馬車はなか

なか来なかつた。そのうちに雨が降ってきた。

空すいていた馬車の中でも、私たちはほとんど無言だった。そして互に相手を不機嫌にさせ合っていた。夕方、やっと霧のような雨の中を、宿屋のあるというある海岸町に着いた。その宿屋も前日のうす汚い宿屋に似ていた。同じような海草のかすかな香り、同じようなランプの仄ほのあかりが、わずかに私たちの中に前夜の私たちをよみがえよみがえ蘇すらせた。私たちはようやく打解けだした。私たちは私たちの不機嫌を、旅先きで悪天候ばかりを気にしているせいにしてしようとした。そしてしまいに私は、明日汽車

の出る町まで馬車で一直線に行つて、ひと先^まず東京に帰ろうではないかと云い出した。彼も仕方なさそうにそれに同意した。

その夜は疲れていたもので、私たちはすぐに寝入った。

……明け方近く、私はふと目をさました。三枝は私の方に背なかを向けて眠っていた。私は寝巻の上からその背骨の小さな突起を確かめると、昨夜のようにそれをそつと撫でてみた。私はそんなことをしながら、ふときのう橋の上で見かけた、魚籠をさげた少女の美しい眼つきを思い浮べた。その異様な声はまだ私の耳についていた。三

枝がかすかに齒ぎしりをした。私はそれを聞きながら、またうとうとと眠り出した……

翌日も雨が降っていた。それは昨日より一そう霧に似ていた。それが私たちに旅行を中止することをいやおう否応なく決心させた。

雨の中をさわがしいひびき響をたてて走ってゆく乗合馬車の中で、それから私たちの乗り込んだ三等客車の混雑のなかで、私たちは出来るだけ相手を苦しめまいと努力し合っていた。それはもはや愛の休止符だ。そして私はなぜかしら三枝にはもうこれっきり会えぬように感じてい

た。彼は何度も私の手を握った。私は私の手を彼の自由にさせていた。しかし私の耳は、ときどき、どこからともなく、ちぎれちぎれになって飛んでくる、例の少女の異様な声ばかり聴いていた。

別れの時はもつとも悲しかった。私は、自分の家へ帰るにはその方が便利な郊外電車に乗り換えるために、ある途中の駅で汽車から下りた。私は混雑したプラットホームの上を歩き出しながら、何度も振りかえって汽車の中にいる彼の方を見た。彼は雨でぐっしより濡れた硝子窓に顔をくっつけて、私の方をよく見ようとしながら、

かえって自分の呼吸でその硝子を白く曇らせ、そしてますます私の方を見えなくさせていた。

*

八月になると、私は私の父と一しよに信州のある湖畔^{こはん}へ旅行した。そして私はその後、三枝には会わなかった。彼はしばしば、その湖畔に滞在中の私に、まるでラヴ・レタアのような手紙をよこした。しかし私はだんだんそれに返事を出さなくなつた。すでに少女らの異様な声が

私の愛を変えていた。私は彼の最近の手紙によって彼が病気になったことを知った。脊椎カリエスせきついが再発したらしかつた。が、それにも私は遂に手紙を出さずにしまった。

秋の新学期になった。湖畔から帰ってくると、私は再び寄宿舎に移った。しかしそこではすべてが変っていた。三枝はどこかの海岸へ転地していた。魚住はもはや私を空気を見るようにしか見なかった。……冬になった。あゝる薄氷りの張っている朝、私は校内の掲示板に三枝の死が報じられてあるのを見出した。私はそれを未知の人で

もあるかのように、ぼんやりと見つめていた。

*

それから数年が過ぎた。

その数年の間に私はときどきその寄宿舎のことを思い出した。そして私はそこに、私の少年時の美しい皮膚を、ちようどかんぼく灌木の枝にひっかかっている蛇へびの透明な皮のよ
うに、惜しげもなく脱いできたような気がしてならなかった。——そしてその数年の間に、私はまあ何んと多く

の異様な声をした少女らに出会ったことか！　が、それらの少女らは一人として私を苦しめないものはなく、それに私は彼女らのために苦しむことを余りにも愛していたので、そのために私はとうとう取りかえしのつかない打撃を受けた。

私ははげしい喀血かっけつ後、かつて私の父と旅行したことのある大きな湖畔に近い、ある高原のサナトリウムに入れられた。医者は私を肺結核はいけつかくだと診断した。が、そんなことはどうでもいい。ただ薔薇ばらがほろりとその花弁を落すように、私もまた、私の薔薇いろの頬を永久に失ったま

でのことだ。

私の入れられたそのサナトリウムの「白樺しらかば」という病棟には、私の他には一人の十五六の少年しか収容されていなかった。

その少年は脊椎カリエス患者だったが、もうすっかりかいふくき恢復期にあつて、毎日数時間ずつヴェランダに出ては、せつせと日光浴をやっていた。私が私のベッドに寝たきりで起きられないことを知ると、その少年はときどき私の病室に見舞いにくるようになった。ある時、私はその少年の日に黒く焼けた、そして唇くちびるだけがほのかに紅い

色をしている細面ほそおもての顔の下から、死んだ三枝の顔が透かしのよう^にに現われているのに気がついた。その時から、私はなるべくその少年の顔を見ないようにした。

ある朝、私はふとベッドから起き上って、こわごわ一人で、窓際まどぎわまで歩いて行ってみたい気になった。それほどそれは気持のいい朝だった。私はそのとき自分の病室の窓から、向うのヴェランダに、その少年が猿股さるまたもはかずに素すっ裸ばだかになつて日光浴をしているのを見つけた。彼は少し前屈まえこじみになりながら、自分の体のある部分をじっと見入っていた。彼は誰にも見られていないと信じて

いるらしかった。私の心臓ははげしく打った。そしてそれをもつとよく見ようとして、近眼の私が目を細くして見ると、彼の真黒な背なかにも、三枝のと同じような特有な突起のあるらしいのが、私の眼に入った。

私は不意に目まいを感じながら、やっとのことでベッドまで帰り、そしてその上へ打つ伏せになった。

少年は数日後、彼が私に与えた大きな打撃については少しも気がつかずに、退院した。

日本文学電子図書館

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行



日本文学電子図書館